

中学・高校生を対象にした「命の大切さを学ぶ教室」の開催概要及び計画

1 開催目的・背景

「命の大切さを学ぶ教室」は、「第2次犯罪被害者等基本計画」（平成23年3月25日閣議決定）に基づき、警察において教育委員会等と連携し、次世代を担う中学生及び高校生に対し、事件・事故等の遺族による講演を通じて、遺族が受けた心の痛み、子どもを亡くした親の思い、生命の大切さ、被害者も加害者も出さない社会を希求する被害者等の切実な願いを直接メッセージとして伝えることで、被害者支援に関する意識の涵養と犯罪などを犯してはならないという規範意識の向上を図るために、平成23年度から法務省人権啓発活動地方委託事業（全額国費）として開催しています。

2 開催状況

平成30年度は15か所（18校）、令和元年度は13か所（14校）において開催（過去の開催結果については次表参照）

	高 校				中 学 校			
	学校名	開催月日	聴講者数	講師名・テーマ	学校名	開催月日	聴講者数	講師名・テーマ
三十 年 度	八代高校 (八代中学校)	4/20	1,000人	山本美也子(交通死亡事故遺族) ※中高一貫校	人吉第三中学校	7/3	50人	笹森 義幸(交通死亡事故遺族)
	必由館高校	6/13	360人	山本美也子(交通死亡事故遺族)	東野中学校	7/18	500人	大庭 茂彌(交通死亡事故遺族)
	翔陽高校	7/13	900人	山下 良一(交通死亡事故遺族)	花陵中学校	10/18	450人	小森美登里(いじめ自死遺族)
	大津高校	8/31	970人	中谷加代子(少年犯罪被害者遺族)	東町中学校	11/9	390人	中谷加代子(少年犯罪被害者遺族)
	上天草高校	10/24	220人	山本美也子(交通死亡事故遺族)	山都町3中学校	11/19	290人	大庭 茂彌(交通死亡事故遺族)
	矢部高校	11/19	160人	大庭 茂彌(交通死亡事故遺族)	桜木中学校	12/14	530人	市原千代子(少年犯罪被害者遺族)
	甲佐高校	12/19	110人	山本美也子(交通死亡事故者遺族)	(美里)中央中学校	12/18	100人	山下 良一(交通死亡事故遺族)
令 和 元 年 度					藤園中学校	12/20	270人	清水誠一郎(殺人被害者遺族)
	有明高校	5/10	850人	大庭 茂彌(交通死亡事故遺族)	湖東中学校	6/21	450人	清水誠一郎(殺人被害者遺族)
	開新高校	7/2	450人	清水誠一郎(殺人被害者遺族)	力合中学校	9/12	535人	中谷加代子(少年犯罪被害者遺族)
	第二高校	7/4	1,250人	山本美也子(交通死亡事故遺族)	下益城城南中学校	10/23	560人	佐藤 逸代(交通死亡事故遺族)
	大津高校	8/30	1,100人	山下 良一(交通死亡事故遺族)	託麻中学校	11/9	980人	一井 彩子(少年犯罪被害者遺族)
	宇土高校 (宇土中学校)	10/1	770人	山下 良一(交通死亡事故遺族)	本渡中学校	11/19	720人	山本美也子(交通死亡事故遺族)
	阿蘇中央高校	10/2	270人	山本美也子(交通死亡事故遺族)	津奈木中学校	12/9	180人	山下 良一(交通死亡事故遺族)
上天草高校	10/25	230人	清水誠一郎(殺人被害者遺族)					

※開催状況は県警ホームページにも掲載しています



開催を希望される学校がありましたら、
熊本県警察本部 広報県民課 犯罪被害者支援室
TEL 096-381-0110 (内線2193~2195)
までご連絡ください。

3 開催の手順・対応

- 開催校選考（希望校からの連絡、教育委員会等からの推薦 等）
- 警察担当者による学校側への事前説明と協力依頼
- 学校側との開催日程・講演内容・講師等の調整
- 警察による講師（県外）への連絡・調整
- 警察から講師への講演依頼文の発出
- 講演会の開催、「感想文・作文作成」
- 警察から講師に対する謝金及び旅費の支出手続（国費）
※警察で予算確保。学校側の負担はございません（一部御遺族を除く）

※ 受講者に対しては、警察庁主催（文科省後援）の「大切な命を守る作文コンクール」（応募締切り：6月中旬）への作品応募をお願いしています（別添チラシ参照）

熊日社会 失っていい命 一つもない

2005年3月18日、次女の有希は、小学校の卒業式とに職の誕生日を同じ日に迎えました。有希は誕生日ケーキのろうそくをひと息に、きれいに吹き消し、それを見た三女は「お姉ちゃん、今年は何も特別な事がないよ」と言いました。

しかし1カ月後、娘はこの世から旅立ちました。中学校の部活の応援に向かう途中、信号待ちの交差点で、赤信号を無視した車が原因の事故に巻き込まれたのです。

立ち寄ったコンビニエンスストアの防犯カメラに8分間、娘が映っていた。

交通事故で次女を亡くした 佐藤 逸代さん(51)＝岐阜市

2月6日、西合志南中での講演から(林田賢一郎)

言葉を紡ぐ

ます。レジ前の有希はいつもと変わらぬ笑顔。事故はこの数分後でした。「あと一回、店内を見て回って」。私は映像に何度も話し掛けました。当時、一番つらいのは私自身だと思ひこんでいました。私が早朝に出掛けた娘に声を掛けていたら、事故に遭わなかったかもしれない。生きる資格がないとも思っています。中3の長女と小5の三女が必死に耐えている時、私は背骨歪みなかつた。数年後、自分を許そうと思えた時、初めて娘たちの思いに気がしました。2人はその間、姉



「飲酒運転ゼロを」被害者遺族が講演 熊本市 熊本市中央区の国府高美也子さん

高で11日、飲酒運転の事故で高校生の息子を亡くした山本美也子さん(44)＝福岡市が講演した。同校では昨年6月、登校中の生徒が飲酒運転の車にはねられて亡くなっており、生徒らは命の重みをかみしめた。

山本さんの長男寛大さん(当時16)は2011年2月、友人と路側帯を歩いていて、飲酒運転の車に後ろからはねられた。

講演は、県警の出前授業「命の大切さ」を学ぶ教室の一環。年数回、県内の学校で開いている。

講演後、「思いは伝わったはず」と山本さん。亡くなった生徒と同級生だった3年の本藤悠大君は「悲しいのは僕らだけではないと気付いた。友人の死を忘れず、大人への声掛けを続けたい」と話した。



山本さんは「飲酒運転は罪のない人の命を奪う無差別殺人と一緒。なぜ息子だったのか」と語り、自らが始めた飲酒運転撲滅プロジェクトを広める活動を紹介。「皆さんと私は大きな悲しみを抱えた仲間。一緒に声を発し続けることで、飲酒運転ゼロの社会にできる」と訴えた。

生きてさえいれば、必ず良いことがある

1999年3月18日、当時18歳だった次男の圭司が亡くなりました。前日の17日午後9時半ごろ、同級生と先輩2人に「日頃の態度が悪い」などと因縁を付けられ、殴る蹴るの暴行を受けたからです。

事件のショックから、私は周囲の気遣いを素直に受け入れることができず、人と関わらないように生活するようになりました。圭司の妹は高校生活がうまくいかず、学校で問題児として扱われ、中退しました。被害に遭い、家族をそれぞれが問題を抱えました。

犯罪や交通事故、病気、自殺などで大切な人を亡くした友達がみなさんの周りにもいると思います。その友達はいつかやがて悲しさを抱えきれなくなったり、問題行動を起しているかもしれないことを知ってほしい。そして、いじめの対象にならないように。

生きていれば、辛いことや悲しいこと、苦しいことがたくさんあるでしょう。そんな時は、勇気を出して周囲の人に相談してください。圭司が助けてくれた手を伸ばしてくれば、振り返りやりたかった。それができていればこのようにならなくて済んだと思います。生きてさえいれば、少し先には必ず良いことや楽しいことがあると思います。生きて、生きて、生きていってください。

NPO法人おかやま犯罪被害者サポート・ファミリーズ理事 市原千代子さん(60)＝岡山県備前市

24日、県警主催の「命の大切さを学ぶ教室」での講演から。(後藤仁孝)

妹だけでなく、母まで失ってしまったのです。どんな自分でも、ありのままを受け入れることが、人を思いやることにつながる。私は有希の命を道し、いろんなことを教えてもらいました。歩きながらスマートフォンを使ったり、音楽を大音量で聞く人が増えています。これは、自分の命を大切にしていることにつながりませんか。失っていい命は一つもない。皆さん、自分のことを好きになって、そして人の事を思いやり、命を大切にしてください。

＝随時掲載

犯罪被害者の遺族の絶えぬ声援を受け、命の大切さを学ぶ特別授業が、熊本市東区の市立万寿中(東区)で開かれた。殺人事件で娘を失った中谷加代子さん(52)＝山口県防府市が講演し、「命を奪った罪を償うことは、命でもできない。生きる意味を真剣に帯びて」と呼びかけた。

被害者らの心の痛みを知り、犯罪のない社会をつくる意識を育んでもらおうと、県警と同校が連携。生徒ら約400人が耳を傾けた。

中谷さんの長女歩さん(当時16歳)は2007年8月、通っていた山口県の

犯罪被害者遺族が講演 命の大切さ呼びかけ 熊本の中学 命の大切さ呼びかけ

熊本市東区の市立万寿中(東区)で開かれた。殺人事件で娘を失った中谷加代子さん(52)＝山口県防府市が講演し、「命を奪った罪を償うことは、命でもできない。生きる意味を真剣に帯びて」と呼びかけた。

被害者らの心の痛みを知り、犯罪のない社会をつくる意識を育んでもらおうと、県警と同校が連携。生徒ら約400人が耳を傾けた。

中谷さんの長女歩さん(当時16歳)は2007年8月、通っていた山口県の



犯罪被害者の遺族講演会 中学生たちが命の大切さを学ぶ

熊本市東区の市立万寿中(東区)で開かれた。殺人事件で娘を失った中谷加代子さん(52)＝山口県防府市が講演し、「命を奪った罪を償うことは、命でもできない。生きる意味を真剣に帯びて」と呼びかけた。

被害者らの心の痛みを知り、犯罪のない社会をつくる意識を育んでもらおうと、県警と同校が連携。生徒ら約400人が耳を傾けた。

中谷さんの長女歩さん(当時16歳)は2007年8月、通っていた山口県の

犯罪被害者遺族が講演 命の大切さ呼びかけ

熊本市東区の市立万寿中(東区)で開かれた。殺人事件で娘を失った中谷加代子さん(52)＝山口県防府市が講演し、「命を奪った罪を償うことは、命でもできない。生きる意味を真剣に帯びて」と呼びかけた。

被害者らの心の痛みを知り、犯罪のない社会をつくる意識を育んでもらおうと、県警と同校が連携。生徒ら約400人が耳を傾けた。

中谷さんの長女歩さん(当時16歳)は2007年8月、通っていた山口県の

死 心ちゃん遺族講演 命の大切さ題材

2011年に熊本市の商業施設で保育園児の長女、心ちゃん(当時3歳)を大人数の男に殺害された清水誠一郎さんが21日、同校で講演し、生徒ら約400人に命の大切さを呼びかけた。

清水誠一郎さん

「生きてる意味を真剣に考えて」と生徒らに呼びかける中谷さん

「生きてさえいれば、必ず良いことがある」と語り、先には必ず良いことや楽しいことがあると思います。生きて、生きて、生きていってください。

NPO法人おかやま犯罪被害者サポート・ファミリーズ理事 市原千代子さん(60)＝岡山県備前市

24日、県警主催の「命の大切さを学ぶ教室」での講演から。(後藤仁孝)

令和元年度「大切な命を守る」全国中学・高校生作文コンクール
★ 国家公安委員会委員長賞(中学生の部)受賞作品 ※ 同コンクール最優秀賞

「生きる」ということ

熊本市立力合中学校3年 上 蘭 祐己

「あなたたちは、ここにいるだけで価値がある。生きることをあきらめないで」
この言葉は、先日学校で行われた「命の大切さを学ぶ教室」で、講師の中谷さんが言われた言葉です。中谷さんは、13年前、高専に通っていた娘の歩さんを、同級生に殺害された犯罪被害者の家族の方です。警察署で亡くなった事実を聞かされた帰り道、あまりの絶望感で何をどうしてよいのか分からなかったそうです。そんな辛い思いをされているにも関わらず、その経験を全国で伝え続けられている中谷さんはとても心が強い方だと思います。これまで周りのたくさんの人に支えられ、悩みながらもこの活動をされていると考えると本当に胸が痛くなりました。

僕は、いじめに遭って死を考えた経験があります。小学校3年生のとき、毎日が憂鬱で、学校に行くのがとても辛かったです。家でも弟とうまくいかずに、毎日を生きるのが大変で、本当にきつく、つらく、何をすればいいのかすら何も分からなくなっていました。母にそんな思いを打ち明けたのは、お風呂の中でした。母はシャワーを止め、湯船につかっていた僕の肩をつかみ、泣きながら話をしてくれました。

「生きててくれてありがとう。生まれてきてくれてありがとう」

母が言ってくれた言葉です。僕はこの言葉に泣いてしまったことを覚えています。胸の痛みが消え、救われたような思いがしたからです。中谷さんの言葉は6年前の母の言葉を思い出させ、胸に突き刺さり、気がついたら涙が出ていました。なぜかは僕にも分かりません。中谷さんの思い、母の思いを考えると言葉にできないほどの感情が僕の胸に押し寄せてきました。

母に打ち明けた後、担任の先生、いじめの相手と何度も話し合い、仲直りをし、友達となって初めて家に遊びに行った日の思いは今でも忘れません。生きていてよかったと心から思いました。

今、僕は「生きる」ということは、未来を信じ続けることだと考えています。誰でも一度や二度は「自分なんて存在していて何になるんだ。自分が生きている意味なんてあるのだろうか」そんなことを考えたことがあると思います。それでも、自分を信じて奮い立たせ、何より生きることを諦めないことが大切だと思います。中谷さんの講話を聞いて母の言葉を思い出し、改めてそう考えました。これからも、何があってもくじけずに、自分を信じて頑張っていきたいと思います。

★ 審査委員奨励賞(高校生の部)受賞作品

「人を傷つけるのは人、人を助けるのも人。」

熊本県立大津高等学校3年 久保 幸彦

僕は、小学6年生の頃に病気で母を亡くした。白血病だった。
ある日僕が学校から帰ると、母が新しいパジャマを買ってくれていた。それから母は、自身が病気であるため入院することになったことを、僕に話した。その頃の僕は、その病気がどのようなものなのか分からなかったが、入院と聞いて少しドキッとした。不安な顔を隠すような笑顔で母は、僕をそっと抱きしめてくれた。母の匂いがしてなんだか落ち着いた。母は入院した。父は毎日母のいる病院に行っていた。帰ってきた父に母のことを聞く日が続いた。そんなある日、家族で母がいる病院に行くことになった。久しぶりに会えると思ったが、母がいる無菌室には、当時小学生の僕は入ることができなかった。家族が母に会っている間、ロビーで待っていた。すると父が、家族のみんなと母と話している姿をビデオで撮ってくれた。画面の中でしか母に会うことができなかったが、みんなとうれしそうに話す母を見られてうれしくなった。それから、しばらく経って母が少しの間、家に帰ってくることになった。うれしくて僕は、学校が終わったら走って家に帰った。家に帰ると椅子に座ってニット帽をかぶった母がいた。長い髪がなくなっていることにはビックリしたが、母に会えてすごくうれしかったのを今でも覚えている。僕は母がいる間に、たくさん甘えたと思う。だが、あっという間に母は病院に帰ってしまった。そして、次に母に会ったときは、母と話すことはできなかった。汗だくになりながら、病院の先生が心臓マッサージをしていた。父は、母の名前を何度も呼んでいた。母の病室に入るのは初めてだったが、やたらと部屋が白く見えたことを覚えている。兄や姉は、横で泣いていたが、僕は泣けなかった。悲しいはずなのに涙が全く出なかった。家に帰ったのは、夜遅くだった。お風呂に入り寝ようとした時に、母のくれたパジャマを見た。そしたら急に涙が溢れてきてその夜は、うめくように泣いた。高校3年生になる今でも、母のくれたそのパジャマはまだ持っている。もう着ることはできないが、入院する前の母のことを思い出せるからだ。

あれから、学校で命の講演会などをたくさん聞いた。講演をされる方々は、事故やいじめによる自殺、僕と同じように病気などの理由で、大切な人を亡くしていた。辛いはずなのに、自分の体験をふまえて「命」についての話をされることは、本当に感謝しないとイケないと思う。

最近のことだが、「命の大切さを学ぶ教室」で、山下さんの話を聞いた。山下さんは事故でご家族を亡くされたと話し、事故を起こした人のこと、大切な家族のこと、残された自分の気持ちを話してくださった。講演中に涙を流しながらもその頃のことを話されていて、山下さんの悲しみが伝わってきた。僕も大切な家族を亡くしているが、山下さんの悲しみを「分かる」とはとても言えなかった。

誰もが大切な人を亡くせば誰よりも悲しい、ましてやその悲しみに順位などはない。だから、命はとてもししいものだと思う。山下さんの言葉で僕がもっとも心に残った言葉がある。

「人を傷つけるのは人、人を助けるのも人」という言葉だ。僕自身、母を亡くして悲しい頃に笑顔で話しかけてきてくれる友達に本当に救われたからだ。人を亡くした悲しみを共感することなどはできない。けど、悲しさに寄り添って支えることはできるのが人間なんだと知った。亡くなった母は、そんな大切な友達のつながりを教えてくれた気がする。僕も、人に寄り添えるような人になりたいと思う。最後に、母が教えてくれた大切な人たちへ。